

町幕府』、圧倒的に山門・五山禅院に關係するものが多いのではないだろうか。

また、国人層として一括された中には、これは索引の人名から推定されるのだが、奉公衆もかなり含まれているのではないだろうか。

筆者が『御前落居記録』などでみるところ、論人には在地の国人層も含まれるが、訴人として現われてくる国人層はほぼ奉公衆とおぼしきものばかりである。

いずれにせよ、この二表は今後、より詳細な検討を加えられ、論文として発表される事を期待したい。

以上、本索引についてそれを紹介しつつ、若干の気付いた点を指摘した。注文にのみ走り、編者の真意を捕えそこなった点については御海容を願う次第である。

百花撩乱と咲きほこる論文の華やかさの陰に隠れた「非個性的な業績」(石母田正『戦後歴史学の思想』六〇五頁)ともいうべき研究者の共有財産となるこのような索引が、こうしたグループの手によって刊行される(聞き及ぶところではこれらは身銭を切つて自費で出版されたとの由である)ことは日本の歴史学界にとって誠に喜ばしいことと言わねばならない。

今後の東洋大学中世法制史料研究会の発展と會員諸兄の研究に実り多いことを心よりお祈りし、この拙ない紹介を終えたい。

(申込先 東京都文京区白山五丁目28-10)

東洋大学史学科 頒価一〇〇〇円(送料別)
(B5判 六七頁 一九七六年十一月 自費出版)

(小林保夫)

弓削達・伊藤貞夫編

『古典古代の社会と国家』

本書は、現在東大の西洋史学科で古典古代史を専攻している、院生の研究成果を中心に編集された論文集である。ギリシア史関係五編、ローマ史関係四編、及び弓削教授の序文の、計十編の論考から成っているが、各論文は独立した性格のものである。ギリシア史の五編すべてがアテナイ史に集中しているのに対し、ローマ史関係のものも、時代的・地域的にいわゆる「古典古代」の周辺部に散らばっている点が特徴的である。

まず「序」であるが、ギリシアのポリスと共和制期のローマを、ともに市民共同体国家としてとらえ、その変化と発展(分解)

によって古典古代史を解釈する弓削教授の論は、その点において明快である。

第一論文、古山正人「前五八〇/七九九年の一〇人のアルコン——ソロン改革後のアテナイ——」は、前五八〇/七九九年のアルコン一〇人の構成が、エウパトリダイ(貴族)五名、アグロイコイ(独立自営農民)三名、デーミウルゴイ(商工業者)二名であることから、ソロンの改革後のアテナイにおいて、非貴族層の中にアルコン就任資格をみだす富裕な市民があらわれ、ポリス内部において、富裕農民や商工業者層の力が強まりつつあったことを推定している。

次に、篠崎三男「古典期アッティカの公的土壌所有——貸借碑文の検討を中心に——」は、古典期アッティカにおける公有地の賃貸が、低利率と期間の長期化により、借地人たる富裕市民に多大の利益をもたらすと同時に、公有地の蚕食につながるものであったことを述べている。

前沢伸行「紀元前四世紀のアテナイの海上貿易——海上貸付の分析を中心に——」においては、海上貿易の出資形態として、前四世紀半ばを境に、それまでのエクドシスに代って、海上貸付がさかんに行われるようになったが、後者における出資者は、

富裕市民層だけではなく、非市民を中心とした中産層が多かったこと、及びその双方が、貿易商人・貸主の両方として活躍したことが推定されている。

伊藤貞夫「古典期アテナイの鉱山経営者」は、「ポーレタイ碑文」の分析によって、前四世紀におけるラウリオン銀山の経営者には、名門貴族と新興富裕者の二つの型が見られるが、後者が主流であったこと、そして鉱山経営によって蓄積された富が経営者の家の興隆の基盤となり、彼らの政治的比重を高めたことを述べている。

桜井万里子「古典期アテナイにおける女性の地位と財産権——Isaios, X 10 の法規を中心に——」において、論者はアテナイにおける女性の地位を財産権の面から取り上げ、古典期においても、家庭内における女性の地位はさほど低くはなく、女性も半ば公然と様々の契約・取引を行っていたが、不動産取引には直接関与しなかった、しかし時代が下るにつれて、次第に女性による不動産の所有や取引も行われるようになってであろうと推測している。

介
次にローマ史関係であるが、毛利晶「ローマ帝政成立期のガリア社会——反ローマの戦いとガリアの民衆——」は、『ガリア

戦記』の丹念な読解に基づいて、カエサル時代の、ローマの支配に対するガリア人社会の対応を考察している。これによると、各部落内部で、親ローマ的な貴族と反ローマ的な民衆の支持を受けた貴族とが対立していたが、前者も、ローマ騎士が進出して彼らの経済的特権を侵害するに及んで、反ローマ闘争に加わったのだという。

坂口明「servus quasi colonus について——奴隸制農場経営衰退の一側面——」において、論者は主としてブリニウスの書翰から、当時のイタリアの農場経営において、家族と私有財産の所有を認められ、分割地を与えられた「小作人的奴隸」による経営が大きな割合を占めていたことを読み取り、これを奴隸制衰退の一つの側面とみなしている。

本村凌二「『クリア』の歴史的性格——帝政期北アフリカ属州史の一断面——」は、北アフリカ諸都市のクリアの起源が、カルタゴ時代の「ヘタイリアイ」にまで遡ることを指摘し、それが帝政初期においては民衆の構成単位として活発な政治活動を行っていたが、やがて民衆の衰退と共に、私的な活動に専念する集団へと変質していったであろうことを推測している。

最後に、松本宣郎「キリスト教大迫害——四世紀初頭のキリスト教徒とローマ帝国——」は、大迫害前夜のキリスト教徒の状況を述べた後に、ディオクレティアヌスによる「大迫害」に綿密な再検討を加え、それが理念においては厳格でありながら、実施面においては穏やかであったことを、具体例に即して論じている。

全体として、とり立てて目を引く新説は見られないが、すべて無理のない結論が導き出されており、枚数も適度である。現在のが国における、古典古代史の研究水準と傾向を知る上において、有意義な論集であろう。

(A5判 三八〇頁 一九七七年六月
東京大学出版会 三六〇〇円)
(大西陸子 京都大学大学院生)

James M. Powell ed.
*Medieval Studies:
An Introduction*

我が国においては一般に歴史学の入門書、あるいは大学における「史学研究法」「史学概論」などの講義も、ドイツ・アカデミ